三国呉の孫権による対外政策についての考察

――馬匹獲得戦略を中心に――

伊藤光成

はじめに

本稿は三国呉の初代皇帝である孫権による対外政策の中で展開された、馬匹獲得戦略を考察するものである。孫権の対外政策についての先行研究は、基本的に時期・方面を限定して論じられたものであり、またその多くは敵対する魏への牽制・圧力を大きな理由として位置づけている。これに対し本稿では、時期による対外政策方針の変遷を見ていきながら、魏への牽制を主目的とする先行研究の議論を再検討し、孫権の対外政策において、実際は馬匹の入手が大きなウエイトを占めていたことを論じたい。

孫権の対外政策、特に対遼東政策について、はじめての本格的な考察を行った重松俊章氏は、孫権と遼東・高句麗との関係について『三国志』各所に散見される記述を時系列順に整理した後、呉の対遼東政策の目的として魏への牽制と軍馬の補充の二点を挙げる(1)。黎虎氏は、遼東が孫権の重要な戦略目標であったと指摘し、遼東遣使の目的は、対魏牽制・馬匹の入手、ひいては天下統一への足がかりとすることにあったと論ずる(2)。菊地大氏は孫権の遼東・高句麗・東方海上といった東アジア地域への対外政策を方面ごとに論じ、これら全体の目的が魏への対抗にあったと考察する(3)。氏は、対遼東政策の目的は単に馬匹入手だけには留まらず、対魏牽制・挟撃の構えを作ることにあったとし、また対高句麗政策の目的についても、馬匹の入手を挙げた

上で、高句麗と結んで公孫氏政権を牽制しようとしたものであったと指摘する。近年では、渡邉義浩氏が、呉の対外政策を独自の国際秩序構築という観点から捉え直す論を展開し、対北方政策には、対魏牽制と共に呉の国際秩序を北方に及ぼす目的が存在していたとしている。[4] 氏の論は、馬匹の購入は遣使の名目であったとする点においても、先行研究と一線を画す。

このように、重松氏が呉の対遼東政策の目的として魏への牽制と軍馬の補充の二点を指摘して以降、先行研究においては氏の見方が踏襲されているものの、この内の前者が強調されていることが分かる。また、公孫氏政権を中心に当時の国際情勢を論じた西嶋定生氏[5]や大庭脩氏[6]、三世紀前半における高句麗の対外政策を論じた余昊奎氏[7]らも魏への牽制・包囲を呉の対遼東政策の目的であるとしており、魏への牽制のための対外政策の存在を前提とした上で論を展開している。

このように、先行研究においては、馬匹獲得は副次的なものであり、第一目的は魏への牽制・包囲にあったとする理解が一般的であると言える。しかし、こうした見方には、①史料に即した検討が不足しており、魏への牽制が目的であったという結論ありきで論が進められている点、②遼東への遣使が黄龍元年（二二九）以降本格化する理由について明確ではない点、③他方面への対外政策との関連性への言及がされていない、もしくは不十分である点、といった問題点が指摘できる。また、渡邉氏は独自の国際秩序の構築という観点から、公孫氏政権を内臣に、高句麗を外臣に位置づけることを対北方政策の目的とするが、公孫氏政権との断交の後に高句麗との関係が本格化する点について、合理的な説明がなされていない。こうした問題点を踏まえ、孫権の対外政策は全体としてどのような方針・動機付けによるものと言えるのか、再検討が必要であろう。本稿では、孫権の対外政策の実情を史料に即して分析することで、これらの問題点を検討したい。

第一章　遼東遣使に至る経緯
―魏及び士氏政権との関係―

第一節　馬匹獲得の動機

本稿のテーマである孫権の馬匹獲得戦略の考察に入る前に、まずは孫権が馬匹を求める動機について考えておきたい。次頁の表は、当時の諸勢力における軍の兵馬の比率を、『三国志』及び裴注よりまとめたものである。このように、曹操や華北の諸勢力と呉との間には、兵馬の比率に約四～八倍の差が存在していた。単純比較は出来ないが、

勢力	人物名	状況	年代	兵馬数	兵馬比率	巻数(裴注史料名)
呉	孫策	劉繇撃破後に集まった軍勢	興平二年(一九五)頃	兵二万余／騎馬千余	二〇対一	巻四六(『江表伝』)
	周瑜	孫策への合流時の軍勢	興平二年(一九五)頃	兵二千／騎馬五十	四〇対一	巻五四
魏	曹彰	烏丸討伐戦	建安二三年(二一八)	兵千／騎馬数百	最低五対一	巻一九
	朱霊	許都守備軍	建安十年(二〇五)頃	兵五千／騎馬千	五対一	巻一七(『魏書』)
蜀漢	劉備	対呉戦への動員	黄初三年(二二二)	兵四万／騎馬二・三千	一三～二〇対一	巻三三(『魏書』)
他	呂布	劉備の救援	建安二年(一九七)頃	兵千／騎馬二百	五対一	巻七
	袁紹	曹操との戦いへの動員	建安五年(一九五)頃	兵十万／騎馬一万	一〇対一	巻六
	公孫度	中原侵攻への動員(未遂)	建安九年(二〇四)	兵三万／騎馬一万	三対一	巻一一

江南地域において馬匹の入手が困難であったことは確実と言える。また、遼東に割拠した公孫度が、曹操や袁紹をも上回る比率で騎馬を保有していたことも注目される。

更に、当時の情勢に目を移せば、建安十三年（二〇八）の赤壁の戦い後より続いた曹操との対峙が、馬匹獲得の動機として考えられるだろう。孫権は、赤壁の戦いの同年に自らが行った合肥攻めに失敗しており、建安十九年（二一四）には、十万の軍で攻めるも敗退する[8]等、合肥を巡る戦いにおいて劣勢を強いられていた。そして黄武元年（二二二）の濡須口の戦いでの勝利後は、馬匹を用いた陸戦が主体となっていったと考えられ[9]、それを示すように、魏の文帝は合肥・襄陽を対呉戦線の最前線と位置づけている[10]。

このように、孫権は、元来馬匹の入手が難しい江南地域を根拠地としながらも、当時の情勢は曹魏勢力に対抗するための軍馬の増強を要求するものになっていった。こうした状況下、孫権は馬匹獲得に向けて様々な方策に出る。

第二節　曹魏勢力との関係

孫権が馬匹を入手した先を考える上でまず注目されるのが、曹魏勢力との関係である。建安二十二年（二一七）、荊州を巡る劉備との対立を背景に、孫権は曹操に降り、婚姻を結んで関係改善を図った[11]。そして荊州を守っていた関羽を破った建安二十四年（二一九）、許昌に遣使した際には、漢の朝廷への奉献と共に馬匹の買い付けを行っている[12]。ここから、曹操との関係によって馬匹の入手ルートをも得たことが分かる。

延康元年（二二〇）、孫権は死去した曹操の後を継いだ曹丕に遣使している[13]。この後曹丕は皇帝に即位し（文帝）、

魏を建国することになるが、孫権が曹魏勢力との関係継続を図っていたことが窺える。文帝は黄初二年（二二一）、孫権を呉王に封じると共に馬四百匹を下賜している。[14] これは文帝が孫権の需要を理解し、下賜したものと考えられるが、このような魏からの厚遇の背景には何があったのであろうか。

この疑問を解く手がかりとなるのが、文帝が呉王封建と同年、孫権に真珠・象牙等十品目の南方物産を要求していることである。[15] これらの物産は、後述する士氏政権との関係で得られたものと考えられ、魏は独力では入手が難しい南方物産の供給先として呉に期待していたことが窺える。

このように、孫権は曹魏勢力との関係によって馬匹の入手ルートを確保した。両者の関係は、魏においても南方物産の入手というメリットが存在したため、維持されていたと考えられる。しかし、そもそも呉の魏への臣事は表面的なものであり、関係の断絶は避けがたいものであった。そうした中、呉独自の馬匹の入手先として着目されるのが、嶺南の士氏政権である。

第三節　士氏政権との関係

後漢末期に交趾太守となった士燮は、嶺南地域の政情不安の間隙を縫って台頭し、朝廷から交州七郡を「董督」する権限を獲得、事実上の「交州牧」として嶺南地域に君臨していた[16]が、建安十五（二一〇）年、孫権が交州刺史に任じた歩騭に対して兄弟と共に服属した。[17]

服属した士氏政権は、孫権に対して様々な物産を献上する。『三国志』巻四九呉書士燮伝には、次のようにある。

燮毎遣使詣權、致雜香・細葛、輒以千數、明珠・大貝・流離・翡翠・瑇瑁・犀・象之珍奇物、異果・蕉・邪・龍眼之屬、無歲不至。壹時貢馬凡數百匹。權輒爲書、厚加寵賜、以答慰之。

（燮遣使する毎に權に詣り、雜香・細葛を致すこと、輒ち千を以て數え、明珠・大貝・流離・翡翠・瑇瑁・犀・象の珍奇なる物、異果・蕉・邪・龍眼の屬、歲ごとに至らざるは無し。壹時に馬を貢すること凡そ數百匹。權輒ち書を爲し、厚く寵賜を加え、以て答え之を慰む。）

このように、士燮は様々な物産を献上しているが、これは文帝から要求された品目と多くが一致する。[18] ここから曹魏勢力との関係維持に、士氏政権のもたらす南方物産が大きな役割を果たしていたことが窺える。しかし、本稿で特に注目したいのは、献上品として馬匹数百匹が記されること

である。これら、士氏政権の献上品に関する記述を検討した川手翔生氏は、士燮が献上した物産の多くが交州で採取可能なものであるとした上で、これらは馬匹を含め、南中（益州南部）でも採取されるものであることを述べ、南中との交易によってこれらの物産を入手していた可能性を指摘している。[19] つまり、孫権は、士氏政権が把握する南中との交易ルートを経由して馬匹を入手していたのである。ただし、「歳ごとに到らざるは無」かった品目とは別に、「壹時」の献上品として記すように、安定的な貢納ではなかったのであろう。

こうした情勢下、安定的な馬匹入手のためには、南方と平行して北方ルートの確保も必要であったと思われる。先述した曹魏勢力との関係維持の他に、孫権は建安年間に既に遼東への遣使を行っていた。『三国志』巻二魏書公孫度伝の裴注に引く『魏略』が載せる公孫淵の上表文には、淵の父康の時代に孫権からの使者を殺したために、孫権が恨みを抱いていたことが記されている。[20] 試み自体は失敗に終わっているものの、早期に遼東との関係構築を構想していたことは注目すべきであろう。

第四節　南中の叛乱への関与

黄初三年（二二二）、孫権が人質を送ることを拒否したことが原因で、魏は呉へ侵攻。孫権は独自の元号（黄武）を建てて自立すると共に、劉備に使者を送って蜀漢と再び同盟を結んだ。[21] 魏との断絶は、北方からの馬匹入手ルートを失うことをも意味するため、必然的に南中との交易ルートの重要性が増すこととなる。こうした中で、孫権は南中への関与を強めていく。

黄武二年（二二三）、つまり再同盟の翌年に劉備が死去すると、その報を聞いた南中豪族の雍闓らが蜀漢に反乱を起こした。『三国志』呉書士燮伝に、

> 燮又誘導益州豪姓雍闓等、率郡人民使遙東附。權益嘉之、遷衛將軍、封龍編侯、弟壹偏將軍・都鄉侯。
> （燮又た益州の豪姓雍闓等を誘導し、郡の人民を率いて遙かに東附せしむ。權益〻之を嘉し、衛將軍に遷し、龍編侯に封じ、弟壹を偏將軍・都鄉侯とす。）

とあるように、雍闓らの反乱を誘導したのは士燮であった。孫権はこれに乗じて雍闓を永昌太守に任じ、[22] 劉璋の子である劉闡を益州刺史に任じて交州と益州の境界に派遣する等積極的な動きを見せている。[23] 反乱自体を孫権が指嗾したか否かまでは不明だが、豪族との仲介役として士氏政権が機能していたことは、彼らが交易等を通じて交流があっ

た証左と言える。孫権としては、反乱を機に、馬産地である南中を影響下に置こうとする意図があったと思われる。呉は、南中豪族の叛乱の後に、自立後も続いていた魏との往来を絶っている[24]。これは蜀漢の使者である鄧芝の説得を受けてのものではあるが、南中豪族の服属が、孫権の判断に影響を与えた可能性は高い。ところが雍闓らは内訌で殺され、反乱自体も諸葛亮の南征によって鎮圧される[25]。また、士燮も黄武五年（二二六）に死去し、呉と南中との繋がりは断たれた。

孫権はこの後、交州支配の強化を目指し、交州を分割して広州を置き、士燮の後任の交趾太守に陳時を派遣する等の施策を行うが、これに抵抗した士燮の子士徽らは呉に反旗を翻す。『三国志』巻六〇呉書呂岱伝によると、討伐に当たった呂岱は士氏一族を処刑して反乱を鎮圧した後、広州を廃止して再び一州に戻し、そのまま交州刺史として駐屯した。しかしながら、黄龍三年（二三一）に呂岱が長沙へと転任する際の薛綜の上疏によれば、当時の交州には賊が跋扈しており、完全に平定されてはいない状況であった[26]。治安が回復されていない交州からの物産の入手や[27]、南中との交易ルートの再構築は難しいものとなっていたであろう。広州・交州を一州に戻したのは黄武五年のことであるため[28]、孫権は、皇帝に即位する黄龍元年（二二九）頃にはこうした交州の状況を把握し、南方からの馬匹の入手を断念せざるを得ない状況にあったと考えられる。

孫権は、魏との断交・南中との断絶によって新たな馬匹の入手ルートを構築する必要性に迫られた。そこで、孫権は遼東に再び目を向けることとなるのである。

第二章　対遼東政策の目的

第一節　燕王封建に至るまでの関係

呉から遼東への使者として、時期と使者の名が明確に見えるのは、黄龍元年五月に派遣された張剛と管篤、嘉禾元年（二三二）三月に派遣された周賀と裴潜である[29]。しかし、『三国志』魏書公孫度伝の裴注に引く『魏略』に掲載する、遼東から魏に送った上書によって、孫権は使者を連年派遣していたことが分かる[30]。黄龍二～三年の間にも遣使が行われたと考えるのが妥当であろう。

この孫権による遼東遣使について、先行研究においては対魏牽制を目的としたものであるとの見方が一般的であることは先述した。嘉禾元年十月、公孫淵は周賀らの帰国に際し宿舒・孫綜を随行させて藩属を申し出ており[31]、これを孫権の求めに応じたものと考えれば、遼東への遣使は公孫淵の服属を目的としたものと考えることに不自然さはな

い。しかし、『三国志』魏書公孫度伝の裴注に引く『魏書』が掲載する、公孫淵が呉に遣使したことを受けて魏が遼東の官民に与えた布告には、次のような一節が見える。

比年已來、復遠遣船、越渡大海、多持貨物、誑誘邊民。邊民無知、與之交關。長吏以下、莫肯禁止。至使周賀浮舟百艘、沈滯津岸、貿遷有無。既不疑拒、齎以名馬、又使宿舒隨賀通好。

（比年已來、復た遠く船を遣わして、大海を越渡し、多く貨物を持し、邊民を誑誘せしむ。邊民無知にして、之と交關す。長吏以下、肯えて禁止する莫し。周賀をして舟百艘を浮かべ、津岸に沈滯し、有無を貿遷せしむるに至る。既に疑い拒まず、齎すに名馬を以てし、又た宿舒をして賀に隨い通好せしむ。）

魏は、呉が遼東の民を誑かして交易を行い、周賀が派遣された際には舟百艘に及ぶ規模になっていることを非難する。「比年已來、復た」との表現は、呉・遼東間の交易が継続的に行われていたことを窺わせる。また、魏の重臣辛毗が、遼東で馬匹を購入する孫権の動きを警戒していることから[32]、交易品が馬匹であったことが分かる。公孫淵は孫権に宛てた上表文の中で、呉からの使者を拒んでいたことを述べている[33]が、その一方で配下の官吏たちは、呉との交易を黙認していた。嘉禾元年に至るまで、両者の関係は、秘密裏の交易が主軸であったと考えられる。

このように孫権は、公孫氏政権との間に同盟・服属といった政治的関係を持たない交易のみの関係を構築しており、公孫淵を服属させるために遼東へ遣使したとは考え難い。孫権の目的はあくまでも馬匹の入手にあったと見るべきであろう。

第二節　燕王封建と公孫淵の裏切り

前節で見たような交易を中心とした呉・遼東関係が大きく転換するのは、嘉禾元年の公孫淵の遣使と、その翌年の孫権による公孫淵の燕王封建[34]である。しかし、孫権が服属を求めていないならば、そもそも嘉禾元年の公孫淵の遣使は如何なる経緯で行われたものであろうか。

『三国志』巻二六魏書田豫伝には、公孫淵の遣使に先立ち、魏による遼東討伐計画があったことが記される。

太和末、公孫淵以遼東叛。……乃使豫以本官督青州諸軍、假節、往討之。會吳賊遣使、與淵相結。帝以賊眾多、又以渡海、詔豫使罷軍。

（太和末、公孫淵遼東を以て叛す。……乃ち豫をして

本官を以て青州諸軍を督し、節を假して、往きて之を討たせしむ。會〻吳賊使を遣わし、淵と相結ぶ。帝、賊衆の多きことを以て、又た渡海することを以て、豫に詔して軍を罷めしむ。）

嘉禾元年（二三二、魏の太和六年[35]）、公孫淵の「叛」を受けて魏の明帝は遼東征伐を決断する。公孫淵が密かに吳と交易を行っていたことが、魏に知られたものであろう。田豫率いる遼東征伐軍の侵攻を前に、公孫淵は折しも遣使してきた吳と結ぶことを決意し、その結果、魏を撤退させている。こうした情勢下、公孫淵は吳に藩属を申し出るのである。吳の重臣張昭は、公孫淵の藩属を魏の討伐を逃れる一時的なものと断じている[36]。張昭の警戒からも窺えるように、藩属は吳が求めたものではなく、魏を牽制するための公孫淵の策略と考えられるのである。

藩属の申し出を喜んだ孫権は、嘉禾二年（二三三）三月、公孫淵は信用ならないとする丞相顧雍ら群臣の反対を押し切り[37]、兵一万を伴う大規模な燕王封建の使節団を派遣[38]する。だが、公孫淵は宿舒が見た国内の様子から、吳は恃むに足りないと判断し[39]、魏への再服属を決断。吳使を斬ってその首を魏に送り、兵と物資を収奪する[40]。張昭・顧雍らの警戒が的中したわけであるが、何故孫権は周囲の反対の中、大規模な遣使を強行したのであろうか。節を改めて論じたい。

第三節　遣使強行の理由

使節団が大規模になった理由を窺わせるのが、『三国志』魏書公孫度伝の裴注に引く『魏略』が掲載する、公孫淵が魏への再服属にあたって奉った上書である。この上書における、吳使を捕えた顚末を述べた部分には、

偽使者張彌・許晏與中郎將萬泰・校尉裴潛將吏兵四百餘人、齎文書・命服・什物、下到臣郡。泰・潛別齎致遺貨物、欲因市馬。軍將賀達・虞咨領餘衆在船所。……使領長史柳遠設賓主禮誘請達・咨、三軍潛伏以待其下、又驅羣馬・貨物、欲與交市。達・咨懷疑不下、使諸市買者五六百人下、欲交市。

（偽使者張彌・許晏、中郎將萬泰・校尉裴潛と吏兵四百餘人を將い、文書・命服・什物を齎し、下りて臣の郡に到る。泰・潛別に遺なる貨物を齎致し、因りて馬を市わんと欲す。軍將賀達・虞咨、餘衆を領めて船所に在り。……領長史柳遠をして賓主の禮を設けて達・咨を誘請し、三軍潛伏して以て其の下りるを待ち、又た羣馬・貨物を驅り、與に交市せんと欲せしむ。達・

咨懐疑して下りず、諸々の市買する者五六百人をして下り、交市せんと欲せしむ。）

とある。使節団には五百人以上の商人が随行していたことは、燕王封建だけでなく交易も目的であったことを示す。加えて疑いながらも交易に応じようとする使者の様子からは、孫権が交易を厳命していたことが窺える。つまり、嘉禾二年の遣使の主眼も、それまで同様交易に置かれていたと考えられる。また、公孫度伝は、燕王封建に際して「金・玉・珍宝」[41]がもたらされたことを特に記す。[42]封建に伴う下賜品ともとれるが、上述の状況を踏まえると、これらには交易品も含まれていたと考えられる。一万の兵を随行させたことについても、嘉禾元年の使者が、帰路に魏将田豫の襲撃を受けていることを考慮すれば、珍宝・馬匹等の交易品や多くの商人を伴った使節団の護衛を目的としたものであると捉えるのが自然であろう。[43]

こうした遣使の目的を示す呉側の史料としては、公孫淵裏切り後の呉の家臣による上疏がある。公孫淵の裏切りへの怒りから、孫権は遼東への親征を企図するも、群臣の反対を受けてこれを撤回する。[44]『三国志』呉書に収録される上疏は陸遜・陸瑁・薛綜の三名[45]のものである。まず、陸遜の上疏には、

淵憑險恃固、拘留大使、名馬不獻、實可讎忿。……今乃遠惜遼東衆之與馬、奈何獨欲捐江東萬安之本業而不惜乎。

（淵、險に憑り固きを恃み、大使を拘留し、名馬獻ぜざること、實に讎忿すべし。……今乃ち遠く遼東の衆の馬を與うるを惜しみ、奈何ぞ獨り江東萬安の本業を捐てんと欲して惜しまざるや。）

とある。陸遜は、使者を拘留して名馬を献上してこないことへの怒りを述べた上で、孫権が遼東の民からの馬匹の入手に執着することを諫め、江東安定という本業に専念することを主張する。そして、彼の弟にあたる陸瑁の上疏の冒頭には、

臣聞聖王之御遠夷、羈縻而已、不常保有。故古者制地、謂之荒服。言慌惚無常、不可保也。今淵東夷小醜、屏在海隅。雖託人面、與禽獸無異。國家所爲不愛貨寶遠以加之者、非嘉其德義也。誠欲誘納愚弄、以規其馬耳。……

（臣聞くならく、聖王の遠夷を御するは、羈縻あるのみにして、常には保有せずと。故に古は地を制するに、之を荒服と謂う。慌惚として常無く、保つべから

ざるを言うなり。今淵は東夷の小醜にして、屏（しりぞ）きて海隅に在り。人面を託すと雖も、禽獸と異なる無し。國家の爲す所の貨寶を愛しまずして遠く以て之に加うるは、其の德義を嘉するに非ざるなり。誠は誘納愚弄し、以て其の馬を規らんと欲するのみ。……）

とある。公孫淵を「遠夷」と位置づけた上で、遼東に財貨を惜しまずに与えた目的は、德義を嘉するためではなく馬匹を得るためであると述べる。また、薛綜の上疏には、

……其方土寒埆、穀稼不殖。民習鞍馬、轉徙無常。卒聞大軍之至、自度不敵、鳥驚獸駭、長驅奔竄、一人匹馬、不可得見。雖獲空地、守之無益。……

（……其の方土寒埆にして、穀稼殖せず。民鞍馬を習い、轉徙して常無し。卒に大軍の至るを聞かば、自ら度りて敵せず、鳥驚獸駭、長驅奔竄、一人匹馬、見るを得べからず。空地を獲ると雖も、之を守るに益無し。……）

とある。薛綜は遼東に出兵することの困難さ、意味の無さを説く中で、勝利を得たとしても人馬共に逃げてしまい、「空地」を得るのみで無益であると主張する。以上三名の上疏をまとめると、次の二点が指摘可能である。

①孫権が遼東と関係を構築した理由はあくまでも馬匹の入手にあり、孫権の怒りの原因は名馬を献上してこないことにあった。つまり、孫権は藩属の使者を送ってきた前年同様に、嘉禾元年の遣使においても遼東から名馬を得ることを期待していたことが分かる。

②陸遜が馬匹への執着を諫めていること、陸瑁が財貨を与えた目的は馬匹の入手にあると説いていること、薛綜が遼東を攻めても人馬共に逃げてしまい、遠征が無益と主張していることは、孫権が公孫淵に裏切られた時点においても尚、馬匹の入手に拘泥していたことを示している。

孫権が遣使を強行した理由について、先行研究の多くは魏への牽制・挟撃体制を整えるためとする。[46] しかしながら実際に派遣された使節団の動向や、その後の重臣の上疏を検討する限り、遣使目的はそれまでと変わらず馬匹の入手であったと考えるべきであろう。このような孫権の馬匹への執着を考慮した上で、次章では高句麗との関係構築を中心に、嘉禾二年以降の動きを検討したい。

第三章　対遼東政策失敗後の対応
―高句麗との関係―

第一節　高句麗との関係構築と断絶

高句麗との関係については、『三国志』呉書呉主伝・嘉禾二年条の裴注に引く『呉書』（以下『呉書』）に詳しい。まずこれによって高句麗との関係構築の経緯を簡単にまとめておく。発端は、嘉禾二年使節団の一部が、遼東から逃れて高句麗王位宮に孫権の詔をもたらしたことにある。彼らを保護した位宮は呉使の帰国に使者を随行させ、臣下の礼をとった。これを受け、孫権は嘉禾四年（二三五）、位宮に「単于」の称号を与えるべく謝宏・陳恂を派遣している。[47]

ここで注目されるのが、孫権が高句麗との関係構築に当たって「単于」号を与えていることである。これについて、菊地氏は公孫淵に与えた「燕王」より上位に位置付けること、遊牧号をイメージさせる称号を与え馬匹確保を容易にすることの二点を目的として挙げ、渡邉氏は高句麗を「北狄」（外臣）と位置付け、呉の国際秩序を北方に及ぼす狙いがあったと述べて菊地説を批判する。[48]見解自体は異なるものの、両氏に共通するのは、孫権側の都合から考察していることである。だが、後漢からは「王」号を与えられていた[49]高句麗に対し、孫権がわざわざ「単于」号を与えたことは、高句麗王位宮の側にもこの称号を積極的に受け入れる理由がある（と孫権が認識していた）と考えなければ理解し難い。こうした中で注目されるのが、延康元年（二二〇）、「濊貊扶余単于」なる者が後漢朝廷に対し奉献を行っていることである。[50]これは扶余王の称号と考えられるが、扶余は、高句麗と抗争中の公孫氏に服属していた。[51]また、当時の遼東には、「烏丸単于」も存在しており、[52]こうした東北アジアにおける「単于」号の使用例を踏まえると、諸勢力との対抗上、高句麗王も「単于」を自称していた可能性は十分考えられる。孫権は、使者によって高句麗王が「単于」を自称していることを知り、歓心を買うため「単于」号を与えたのではないか。[53]或いは高句麗王側が単于号を認めるように要望した可能性も考えられるが、いずれにしても孫権が、高句麗との関係構築に当たって「単于」号が効果的であると判断したものであろう。

ただ、『呉書』によると、嘉禾四年の遣使も困難を伴った。孫権の動きを知った魏が幽州刺史の諷旨によって、位宮に対し呉の使者を斬ることを促したのである。これを察知した呉側が、迎えの使者を人質に取ったため、位宮は謝罪し馬数百匹を献上して事を収めている。しかし、翌嘉禾五年（二三六、魏の青龍四年）に孫権が派遣した胡衛らは

斬られて魏に首を届けられている。[54] 孫権の配慮も空しく位宮は諷旨を受けた時点で魏への服属を決意していたのであろう。

第二節　対高句麗政策の目的

前節では、呉・高句麗間の関係を概観したが、これを踏まえ、次に対高句麗政策の目的について考えたい。やはり一番に考えられるのは、馬匹の入手であろう。高句麗王位宮は謝罪の証として馬数百匹を献上しており、これは人質を解放するため呉使側の求めに応じてのもの、もしくは呉使の歓心を買う最善の手段と位宮が判断してのものであろう。呉に馬匹の需要があることを位宮が把握していたことは間違いない。孫権は、南中・遼東に続く新たな馬匹入手ルートを構築しようとしていたと考えられる。先述した通り、高句麗王への詔を携えた嘉禾二年の使節団を率いる賀達と虞咨は、公孫淵を疑って下船をためらっている。群臣の反対を押し切ったとは言え、孫権も公孫淵を全面的に信頼していたわけではなかったのであろう。遼東との関係構築が不首尾に終わった場合の次善策として高句麗からの馬匹の入手を構想し、孫権は高句麗王への詔を準備したのではないだろうか。

ただし、先行研究においては、菊地氏が馬匹の獲得に加えて公孫氏政権への牽制が目的にあったと指摘し、余氏が遼東への前線基地建設のために高句麗の援助を期待していたと考察するように、[55] 対高句麗政策の目的は遼東への軍事的圧力を目的としたものと位置づけられる。特に余氏は、『三国志』巻三魏書明帝紀・景初元年条の記事を、孫権の遼東出兵企図の根拠として挙げる。

秋七月…孫權遣將朱然等二萬人圍江夏郡。荊州刺史胡質等擊之、然退走。初、權遣使浮海與高句驪通、欲襲遼東。遣幽州刺史毋丘儉率諸軍及鮮卑・烏丸、屯遼東南界、璽書徵公孫淵。淵發兵反。儉進軍討之、會連雨十日、遼水大漲、詔儉引軍還。

（秋七月…孫權將朱然等二萬人を遣わし江夏郡を圍ましむ。荊州刺史胡質等、之を擊ち、然るに退走す。初め、權、使を遣わし海に浮かび高句驪と通ぜしめ、遼東を襲わんと欲す。幽州刺史毋丘儉を遣わし諸軍及び鮮卑・烏丸を率い、遼東の南界に屯せしめ、璽書して公孫淵を徵す。淵、兵を發して反く。儉、軍を進めて之を討つに、會〻連雨十日し、遼水大いに漲り、儉に詔して引きて軍を還さしむ。）

このように、景初元年（二三七、呉の嘉禾六年）に魏は

呉と高句麗が結んだことを理由として、遼東に出兵している。ただ、先述したように嘉禾五年（二三六）、既に高句麗は魏に帰順しており、すぐさま位宮が呉と結ぼうとするとは考え難い。魏が、この年に呉が江夏を攻めていることを利用し、呉の脅威を喧伝して、遼東出兵の大義名分としたものと思われる。これを傍証するかのように、毋丘倹は、即位以来取り立てて功業のない明帝のために、困難を伴う呉・蜀の平定の代わりとして、遼東の平定を提案している。[56] 遼東出兵がこうした意図の下行われたことを考えれば、呉と高句麗の同盟は、政治的思惑によって作られた仮構と見た方が自然であろう。

本節で見てきたように、対高句麗政策は、遼東との断絶後の新たな馬匹の入手ルートを確保する目的を持ったものと考えられる。高句麗を戦略的な提携相手と見做していたならば、一度は魏に靡こうとした位宮を馬の献上によって許し、その翌年に再び遣使するという孫権の動きは不自然である。孫権が馬匹の入手先以上の展望を、高句麗との関係に持っていたとは考え難い。

第三節　魏との関係と対北方政策の帰結

前節まで、嘉禾年間における呉と高句麗の関係を見てきたが、ここで『三国志』呉書呉主伝・嘉禾四年条に見える、魏の使者が馬匹と真珠・翡翠・玳瑁との交易を求めた記事に注目したい。

魏使以馬求易珠璣・翡翠・瑇瑁。權曰、「此皆孤所不用。而可得馬。何苦而不聽其交易」。

（魏、使して馬を以て珠璣・翡翠・瑇瑁に易えんことを求む。權曰く、「此れ皆孤が用いざる所なり。而るに馬を得べし。何ぞ苦しんで其の交易を聽（ゆる）さざるべけんや」と。）

嘉禾四年（二三五）は、孫権が高句麗王位宮に「単于」号を与えた年でもある。つまり、高句麗を巡る対立の最中に、魏は馬匹と南方物産の交易をオファーしているのである。これらの物産はいずれも文帝が孫権に要求した品目と一致する。魏の、遼東・高句麗からの馬匹の入手を阻害する一方で交易を求める姿勢からは、南方物産の需要が継続していたことが窺える。

また最後に、公孫氏政権と呉との関係の帰結について見ておきたい。景初二年（二三八、呉の赤烏元年）、魏は司馬懿を派遣して本格的な遼東征伐に乗り出す。[57] すると公孫淵は「燕王」を名乗って呉に再び服属の使者を派遣し、救援を求めた。[58] 議論の末、孫権は翌年援軍を派遣するも時既に

遅く、公孫氏政権は滅亡を迎える。意見の対立があった中でも孫権が派兵を決断したのは、馬匹の入手を魏に頼らざるを得ない現状を打開せんとしたからではないだろうか。

おわりに

本稿では、孫権の対外政策について、馬匹の獲得という観点から検討を行ってきた。検討の結果をまとめると、次の通りである。

①呉では、江南地域における馬匹の不足、魏の軍事的脅威という二つの要因から、馬匹の入手が最重要課題として認識されており、これを解決するため、孫権は対外政策による馬匹の入手ルートの確保を目指した。

②孫権は馬匹が豊富な地域との関係の構築に当たり、叛乱支援・南方物産の供給[59]・称号の賜与等、様々な方策により相手の歓心を買うことに努めた。

③孫権の対外政策については、従来対魏牽制や独自の国際秩序の構築を目的としたものであるとされてきたが、諸史料に見える孫権及び呉の家臣の言動からは、馬匹の入手以上の意図を見いだすことは難しい。

呉のこうした馬匹を巡る対外政策方針を象徴するのが、第二章でも引用した陸瑁の上疏である。本稿の論旨を再確認する意味で、後段部分を併せて紹介したい。

> 國家所爲不愛貨寶遠以加之者、非嘉其德義也。誠欲誘納愚弄、以規其馬耳。……北寇與國壤地連接、苟有間隙、應機而至。夫所以越海求馬、曲意於淵者、爲赴目前之急、除腹心之疾也。而更棄本追末、捐近治遠、忿以改規、激以動衆。斯乃猾虜所願聞、非大吳之至計也。
>
> （國家の爲す所の貨寶を愛しまずして遠く以て之に加うるは、其の德義を嘉するに非ざるなり。誠は誘納愚弄し、以て其の馬を規らんと欲するのみ。……北寇は國と壤地連接し、苟くも間隙有らば、機に應じて至らん。夫れ海を越えて馬を求め、意を淵に曲ぐる所以は、目前の急に赴くに、腹心の疾を除かんが爲なり。而るに更に本を棄て末を追い、近きを捐て遠きを治め、忿りて以って規を改め、激して以て衆を動かす。斯れ乃ち猾虜の願聞する所にして、大吳の至計に非ざるなり。）

陸瑁は「目前の急」たる魏の軍事的脅威を述べ、遼東に馬匹を求める理由を「腹心の疾」を除くためとしている。こ

れまで見てきたように、当時、魏との戦いは騎兵を用いた陸戦が主体となっていた。また、南中からの入手ルートが途切れたことで、馬匹を求めるために遠方の遼東との関係を構築する必要に迫られていた。「腹心の疾」という表現からは、馬匹の不足が、存立を左右するファクターと考えられ、政策方針を規定する最重要課題と見なされていたことが窺える。だからこそ、遼東との関係は「徳義」に基づくものではなく、あくまでも馬匹を入手するための方策であった。陸瑁の上疏からは、こうした呉の姿勢を読み取ることが出来る。無論、この上疏は孫権の軽挙妄動を諫めるものではあるが、呉の国内における馬匹への認識を端的に示しているものと言えよう。

本稿では、孫権の対外政策が、あくまでも実利的な面を重視したものであったことを指摘してきた。こうした対外政策の展開の中で注目されるのは、漢代までの対外関係を規定してきた、所謂「冊封体制」の論理のみでは解釈できない点が存在することである。すなわち中華と夷狄を峻別する華夷思想を前提として、来朝する周辺諸国の存在を、中国王朝の天子の徳の高さのバロメーターとする論理[60]から考えれば、馬匹の入手を最優先とした周辺諸勢力との関係構築は、特異なものと言えるだろう。この点について最後に考え、併せて今後の展望を述べたい。

西嶋定生氏は三国時代のアジアの国際関係を論ずる中で、それまで漢王朝が担ってきた冊封体制の中心が、当時は魏・呉・蜀漢の三国に分極していたと述べる[61]。しかし、遼東との間に交易のみの関係を構築したこと、従来「東夷」として「王」号を与えられていた高句麗王の歓心を買うために「単于」号を賜与したこと等を見るに、孫権は馬匹の入手という実利を最優先にしており、冊封体制の論理に基づく伝統的な観念や国際秩序をそれほど重視していたとは考えられない。陸瑁は遼東との「徳義」に基づく関係の存在をはっきり否定している。本稿の検討結果を踏まえると、漢代の統一王朝を前提とする国際関係を、そのまま三国時代に適用することは留保せねばならないように思われる。ただ、今回はあくまでも呉の対外政策を取り上げて、その特徴を述べるに留まってしまった。三国時代において、中国王朝と周辺諸国・諸民族との関係が、漢代からどのように変化していったのかを考えるためには、まだ検討すべき点は多い。特に後漢から禅譲を受けた魏の対外政策についての検討は、こうした問題の考察に不可欠であろう。今後の課題としたい。

註

（1）重松俊章「孫呉の対外発展と遼東との関係」（九州帝国大学法文学部編『九州帝国大学法文学部十周年記念哲学史学文学論文集』岩波書店、一九三七）

（2）黎虎「孫権対遼東的経略」（『魏晋南北朝史論』學苑出版社、一九九八）

（3）菊地大「孫呉政権の対外政策について ―東アジア地域を中心に―」（『駿台史学』一一六、二〇〇二）

（4）渡邉義浩「孫呉の国際秩序と亶州」（『三國志よりみた邪馬臺國』汲古書院、二〇一六）

（5）西嶋定生「親魏倭王冊封に至る東アジアの情勢 ―公孫氏政権の興亡を中心として―」（井上光貞博士還暦記念会編『古代史論叢』上、吉川弘文館、一九七八）

（6）大庭脩『親魏倭王』（学生社、一九七一／増補新版二〇〇一）

（7）余昊奎／井上直樹訳「三世紀前半の東アジアの国際情勢と高句麗の対外政策」（『朝鮮学報』二二七、二〇一三）

（8）『三国志』巻四七呉書呉主伝・建安十九年条「權自率衆圍合肥……權攻城踰月不能下」、『三国志』巻一七張遼伝「權率十萬衆圍合肥……權守合肥十餘日、城不可拔、乃引退」

（9）陸遜による襄陽侵攻の際の記述（『三国志』巻五八呉書陸遜伝「嘉禾五年、權北征、使遜與諸葛瑾攻襄陽。……乃密與瑾立計、令瑾督舟船、遜悉上兵馬、以向襄陽城」）から、歩兵と騎兵主体の編成で魏との戦いが行われており、舟は兵馬を輸送する手段となっていたことが分かる。

（10）『三国志』巻三魏書明帝紀・青龍二年条「先帝東置合肥、南守襄陽、西固祁山、賊來輒破於三城之下者、地有所必爭也」

（11）『三国志』呉書呉主伝・建安二十二年条「春、權令都尉徐詳詣曹公請降、公報使脩好、誓重結婚」

（12）『三国志』呉書呉主伝・建安二十四年条「權遣校尉梁寓奉貢于漢、及令王惇市馬」

（13）『三国志』巻二魏書文帝紀・延康元年条「孫權遣使奉獻」

（14）『三国志』呉書呉主伝・黄武元年条 裴注引『魏略』「使南面稱孤、兼官累位、禮備九命、名馬百駟、以成其勢、光寵顯赫、古今無二」

（15）『三国志』呉書呉主伝・黄初二年条 裴注引『江表伝』「魏文帝遣使求雀頭香・大貝・明珠・象牙・犀角・瑇瑁・孔雀・翡翠・鬬鴨・長鳴雞」

（16）士燮の台頭と士氏政権の形成については、川手翔生「嶺南士氏の勢力形成をめぐって」（『史観』一六七、二〇一二）を参照。

（17）『三国志』巻四九呉書士燮伝「建安十五年、孫權遣步騭

爲交州刺史。騭到、燮率兄弟奉承節度」

(18) 文帝が指定した十品目のうち、香・大貝・明珠・象牙・犀角・玳瑁・孔雀・翡翠の八品目が士燮の献上品と一致している。また、長鳴鶏については漢代に交趾の産物として献上した前例が見え（『太平御覧』巻九一八羽族部五・雞条引『西京雑記』「成帝時、交趾・越嶲獻長鳴雞」）、士氏政権の献上品にも含まれていた可能性がある。

(19) 川手翔生「嶺南士氏交易考」（『史滴』三四、二〇一二）

(20) 『三国志』巻二一魏書公孫度伝 裴注引『魏書』「臣父康、昔殺權使、結爲讎隙」）。

(21) ただし、『三国志』呉書呉主伝・黄武元年条に、「權使太中大夫鄭泉聘劉備于白帝、始復通也。然猶與魏文帝相往來、至後年乃絶」とあり、蜀漢との関係修復後も、文帝との使者の往来は継続していた。

(22) 『三国志』巻四三蜀書呂凱伝「闓又降於吳、吳遙署闓爲永昌太守」

(23) 『三国志』巻三一蜀書劉璋伝「璋卒、南中豪率雍闓據益郡反、附於吳。權復以璋子闡為益州刺史、處交・益界首」

(24) 鄧芝が使者として呉に派遣された際、雍闓によって呉に送られた益州太守張裔の返還交渉も行われている（『三国志』巻四五蜀書鄧芝伝・同巻四一蜀書張裔伝）。

(25) 松尾亜季子氏は諸葛亮の南征の目的について、①漢の衰退により断絶していた「西南シルクロード」の再開、②兵力・土地開発のための人的資源確保、③呉と益州との間のルートの遮断、の三点を挙げた上で、南征は「在地のコミュニティの掌握と孫呉への牽制を同時に可能にする手段」であると位置づける（松尾亜季子「蜀漢の南中政策と『西南シルクロード』」『三国志研究』六、二〇一一）。

(26) 『三国志』巻五三呉書薛綜伝「今日交州雖名粗定、尚有高涼宿賊。其南海・蒼梧・鬱林・珠官四郡界未綏、依作寇盜、專爲亡叛逋逃之藪」

(27) 呂岱は交州平定後、扶南・林邑等に遣使し、貢納を受けている（『三国志』呉書呂岱伝「岱既定交州……遣從事南宣國化、暨徼外扶南・林邑・堂明諸王、各遣使奉貢」）。南方物産が交州において入手出来なくなったために、更に南方の国々からこれらを得ようとしたものか。尚、呂岱の遣使については、杉本直治郎「三国時代における呉の対南策」（『東南アジア史研究Ⅰ』巌南堂書店、一九六八）や菊池大「孫呉・東晋と東南アジア諸国」（鈴木靖民・金子修一編『梁職貢図と東部ユーラシア世界』勉誠出版、二〇一四）等の研究がある。

(28) 『三国志』呉書呉主伝・黄武五年条「是歲、分交州置廣州、俄復舊」

(29) 『三国志』呉書呉主伝・黄龍元年条「五月、使校尉張剛・

管篤之遼東」『三国志』呉書呉主伝・嘉禾元年条「三月、遣將軍周賀・校尉裴潛乘海之遼東」

(30) 『三国志』魏書公孫度伝 裴注引『魏書』「孫權慕義、不遠萬里、連年遣使、欲自結援」
また、『三国志』魏書公孫度伝の裴注に引く『呉書』中の公孫淵から孫権への上表にも、「葛都尉」という呉主伝に見えない使者の名がある（「前後裴校尉・葛都尉等到、奉被敕誡」）。

(31) 同「冬十月、魏遼東太守公孫淵遣校尉宿舒・閭中令孫綜稱藩於權、并獻貂馬。權大悅、加淵爵位」

(32) 『三国志』巻二五魏書辛毗伝「竊聞諸葛亮講武治兵、而孫權市馬遼東、量其意指、似欲相左右」

(33) 『三国志』魏書公孫度伝 裴注引『呉書』「退念人臣交不越境、是以固守所執、拒違前使」

(34) 『三国志』魏書公孫度伝「權遣使張彌・許晏等、齎金玉珍寶、立淵為燕王」

(35) 年代は、『三国志』巻一四魏書蔣済伝の裴注に引く『戦略』による（「太和六年、明帝遣平州刺史田豫乘海渡、幽州刺史王雄陸道、并攻遼東」）。

(36) 『三国志』巻五二呉書張昭伝「淵背魏懼討、遠來求援、非本志也」

(37) 『三国志』呉書呉主伝・嘉禾二年条「舉朝大臣、自丞相雍已下皆諫、「以爲淵未可信、而寵待太厚。但可遣吏兵數百護送舒・綜」。權終不聽」

(38) 同「三月、遣舒・綜還、使太常張彌・執金吾許晏・將軍賀達等將兵萬人、金寶珍貨、九錫備物、乘海授淵」

(39) 『三国志』魏書公孫度伝 裴注引『魏名臣奏』「宿舒親見賊權軍眾府庫、知其弱少不足憑恃、是以決計斬賊之使」

(40) 『三国志』呉書呉主伝・嘉禾二年条「淵果斬彌等、送其首于魏、沒其兵資」

(41) 『三国志』巻五八呉書虞翻伝によると、「南海の珠」が「珍宝」の代表例であった（「聞玉出崑山、珠生南海、遠方異域、各生珍寶」）。ここでの「珍宝」も「珠」等の南方物産の可能性は高い。遼東との関係においても南方物産が役立てられていたと考えられる。

(42) 『三国志』魏書公孫度伝「權遣使張彌、許晏等、齎金玉珍寶、立淵為燕王」

(43) 『三国志』呉書呉主伝・嘉禾元年条「秋九月、魏將田豫要擊、斬賀于成山」

(44) 『三国志』呉書薛綜伝「時公孫淵降而復叛、權盛怒、欲自親征。……時羣臣多諫、權遂不行」

(45) 『三国志』呉書陸遜伝、同巻五七呉書陸瑁伝、同呉書薛綜伝

(46) 黎虎 註2前掲「孫権対遼東的経略」、菊地大 註3前掲

「孫呉政権の対外政策について」、余昊奎 註7前掲「三世紀前半の東アジアの国際情勢と高句麗の対外政策」

(47) 『三国志』呉書呉主伝・嘉禾二年条 裴注引『呉書』「閒一年、遣使者謝宏・中書陳恂拜宮爲單于、加賜衣物珍寶」

(48) 菊地大 註3前掲「孫呉の国際秩序と亶州」

義浩 註4前掲「孫呉政権の対外政策について」、渡邉

(49) 『三国志』巻三〇魏書東夷伝・高句麗条「漢光武帝八年、高句麗王遣使朝貢、始見稱王」

(50) 『三国志』魏書文帝紀・延康元年条「濊貊扶餘單于、焉耆・于闐王皆各遣使奉獻」

(51) 『三国志』魏書東夷伝・夫余条「夫餘王尉仇台更屬遼東」

(52) 『三国志』巻二八魏書毋丘倹伝に、魏の遼東出兵に際し、「右北平烏丸単于」らが降った記述が見える（「右北平烏丸單于寇婁敦・遼西烏丸都督率衆王護留等、昔隨袁尚奔遼東者、率衆五千餘人降」）。

(53) 孫権は単于に封ずると共に「衣物珍寶」を与えている（註47参照）が、これも位宮の歓心を得ようとしたものであろう。「珍宝」については註41も参照。

(54) 『三国志』魏書明帝紀・青龍四年条「秋七月、高句驪王宮斬送孫權使胡衞等首、詣幽州」

(55) 菊地大 註3前掲「孫呉政権の対外政策について」、余昊奎 註7前掲「三世紀前半の東アジアの国際情勢と高句麗の対外政策」

(56) 『三国志』巻二二魏書衞臻伝「幽州刺史毋丘倹上疏曰、「陛下即位已來、未有可書。吳・蜀恃險、未可卒平、聊可以此方無用之士克定遼東」」

(57) 『三国志』魏書公孫度伝「二年春、遣太尉司馬宣王征淵」

(58) 『三国志』魏書公孫度伝 裴注引『魏書』「遣使謝吳、自稱燕王、求爲與國」、『三国志』魏書公孫度伝 裴注引『漢晋春秋』「公孫淵自立、稱紹漢元年。聞魏人將討、復稱臣於吳、乞兵北伐以自救吳人欲戮其使、羊衜曰、「不可、是肆匹夫之怒而捐霸王之計也。不如因而厚之、遣奇兵潛往以要其成。……」權曰、「善」」

(59) 註27・41・53も参照。また、黄龍年間以降の南方物産の入手先としては、孫権が夷州（台湾）・珠崖（海南島）への派兵を企図したこと（『三国志』呉書陸遜伝「權欲遣偏師取夷州及朱崖、皆以諮遜」）にも着目されるが、紙幅がない。今後の課題としたい。

(60) 西嶋定生「六―八世紀の東アジア」（『岩波講座日本歴史第二巻古代二』岩波書店、一九六二）

(61) 西嶋定生『邪馬台国と倭国』（吉川弘文館、一九九四）